

生徒の興味・関心、主体性を 阻害しない「読み」の授業

新しい指導を考える会

教師が、一つの文学教材を指導するとき、ともしれば生徒全員に、「一つの正答」に向かって「同じ方法」で読ませようとしがちである。そして、それが、授業において、しばしば生徒の興味・関心をそぎ、主体性を阻害してきた。

本来、生徒は、文学作品を自由に読む。例えば、ある生徒は歴史的な関心をもって。また、ある生徒は人生を考えるために。そして、ある生徒は単なる娯楽として……。もちろん、文学作品を読んで感じることも考えることも、それぞれである。例えば、登場人物について見ても、常に主人公に共感できるとは限らない。つまり、文学教材の指導で、生徒全員に「同じ方法」で読ませて、「一つの正答」に導くということ自体に無理があるのではないかと考えるのである。

ここでは、三年二期教材『故郷』について、生徒の多面的な読みを生かした授業をいくつか提案してみたい。

1 作者や時代背景に着目した授業

『故郷』を読むとき、作者・訳者や歴史的背景に関心をもつ

〈例〉↓ 暗い気持ち、たまらなく寂しい気持ち。

(4) 「離郷」の場面（P97L11〜終わり）を、故郷の自然描写を中心に読み、「わたし」の心境について考えさせる。

…… 両岸の緑の山々は、たそがれの中で薄墨色に変わり、次々と船尾に消えた。……

古い家はますます遠くなり、故郷の山や水もますます遠くなる。……

〈例〉↓ 失望した気持ち。記憶から消えても惜しくはない気持ち。

(5) (3)と(4)で考えた「わたし」の気持ちを対比させ、二十年ぶりに帰郷したにもかかわらず、なぜ、故郷を離れるときにこのような心境になったのかを想像させる。

〈例〉↓ 故郷に帰って、何かいやなことがあったのではないだろうか。きつと、故郷のよさがかき消されるようなことがあったのにちがいない。

(6) 「想像したことが当たっているかどうかを確かめてみよう。」と投げかけて、全文を読ませる。

(7) 「帰郷する」―「故郷で過ごす」―「故郷を離れる」の三つの場面のうち、二つ目には、少年時代の回想が小英雄ルントウの鮮烈な心象風景とともに（入れ子型になって）描かれており、それが、「わたし」の心境の変化に大きな影響を与えていることに気づかせる。また、この回想場面の心象風景が、作品の最後の四行の伏線になっていることにも気づかせる。

このような授業の後には、発展学習として、同じストーリーで構成を工夫して書かせてみたり、簡単な物語を作らせてみたりするのも楽しいだろう。

生徒がいる。そこで、導入において、魯迅の経歴や作品に描かれた時代背景について、社会科で学習したことも想起させながら説明する。デジタル教材等を用いて、視覚に訴えるのも効果的である。説明は簡潔に概略のみとし、関心の高い生徒には、調べる方法を示してさらに深く調べるように促す。調べたことは「国語科通信」等で紹介するなどしたい。

2 構成に着目した授業

文学作品を読んでいると、時間や場面の転換など、文章構成のうまさに目を見張るときがある。『故郷』は、帰郷した「わたし」が故郷で過ごす時間的な流れの中に回想場面を挿入し、「わたし」の心理的な明暗をうまく描き出している。「少年の日の思い出」（一年）で、現在大人になった「僕」が過去を回想して語るという構成のおもしろさと効果に気づいている生徒は、『故郷』の、現在―過去―現在という入れ子型の構成に関心をもつのではないだろうか。

そこで、次のような授業を提案する。

(1) 文章の構成が、「帰郷する」―「故郷で過ごす」―「故郷を離れる」の大きく三つに分かれることを知らせる。

(2) 自然描写は、話者の心の投影であることを確認する。

(3) 全文を読む前に、「帰郷」の場面（はじめ〜P87L3）を、故郷の自然描写を中心に読み、「わたし」の心境について考えさせる。

…… 苦くるのすき間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。……

3 描写表現（特に人物描写）に着目した授業

『故郷』には、優れた人物描写が多い。表現を詳細に追っていくと、そこに、登場人物の姿形や内面までもが浮かび上がってくる。まるで、精緻な「言葉のスケッチ」を見るようである。生徒の中には、その表現のすばらしさに気づき、関心をもつ者もいるだろう。そして、その効果に驚くにちがいない。

そこで、例えば、回想場面と現在の場面について、人物描写からルントウの変貌ぶりを実感させるために、次のような授業を提案したい。

(1) 人物描写の部分を読んで、三十年前のルントウの姿と現在のルントウの姿を、次のように表にまとめさせる。

	三十年前	現在
背丈	――	三十年前の倍ほど。
顔	つやのいい丸顔	黄ばんだ色。 深いしわがたたまれている。

(2) まとめた表をもとに、ルントウの姿形を簡単に描かせてみる。特に、傍線部などは、しわの様子を、しわが、「できる」「よる」「刻まれる」「たたまれる」など、様々に置き換えてみて、しわの深さの違いなどを考えさせるようにする。

実践提案 ①

実践提案 ②

実践提案 ③

4 生徒の価値観の違いに着目した授業

生徒の読みの質的な差異は、もちろん国語の学力にも大きく依存すると考えられるが、個々の生徒がもつ個性の反映そのものであり、個々の生徒がもつ感性や経験、価値観の差異などに起因するのではないかと考えられる。つまり、生徒は作品を、無意識のうちに自分の価値観等のフィルターを通して読んでるのである。

そこで、生徒の価値観の違いから来る読みの違いを認め、生かした、次のような授業を提案したい。

- (1) 登場人物（「わたし」、ルントウ、ヤンおばさん）の人物像について考えるために、下表のようにまとめさせる。

登場人物	人物像
「わたし」	<ul style="list-style-type: none"> ・むだの積み重ねで魂をすり減らす生活をしている。 ・手製の偶像のような希望をもっている。
ルントウ	<ul style="list-style-type: none"> ・打ちひしがれて心が麻痺する生活をしている。 ・少年時代は、「わたし」にとって小英雄のようだったが、今は、でくのぼうみたいな人間になっている。 ・腕や皿を灰の山に埋めておいて盗もうとした。
ヤンおばさん	<ul style="list-style-type: none"> ・やけを起こして野放図に走る生活をしている。 ・昔は、豆腐屋小町と呼ばれるような女性だったのに、今は、コンパスのようになっている。 ・行きがけの駄賃に手袋を盗んだり、犬じらしをつかんで飛ぶように走り去ったりした。

- (2) 人物像について、各自の考えを話し合わせる。

〈例〉↓私は、非常に厳しい生活の中でも、人間らしさを失わず希望をもって生きている「わたし」の生き方にひかれるわ。(生徒A)

〈例〉↓僕は、ルントウに同情するなあ。子どくさん、凶作、重い税金……。寄ってたかっていじめられたら、僕だってでくのぼうみみたいな人間にもなるし、つい盗みもしてしまうかもしれない。「わたし」は、ルントウたちに比べたら、生活も楽だから、でくのぼうみたいたいにならなかつただけじゃないかなあ。(生徒B)

〈例〉↓この作品の中では、「わたし」が主人公だけど、私は、こんな厳しい状況の中でたくましく生きているヤンおばさんも憎めないわ。生活力があっていいんじゃない。盗みを犯したと言っても目の前でだし、手袋や犬じらしでしょう。ルントウよりもよっぽど許せるし……。(生徒C)

従来の指導では、ともすると前記のような「読み」を封じ込め、「二つの正答」に収束させることが多かった。それは、「その読む自分」の否定につながり、生徒から文学本来の楽しさを奪うことにもなっていた。

価値観の違いに起因する個性的な読みを、一連の授業のどこかの段階で取り上げ、話し合わせたりすることは、必ずや文学の授業を活性化し、楽しい授業を実現するだろう。「読書」としての読みも、大切にしていきたい。

5 音読（朗読）を取り入れた授業

最近ブームにもなっているが、名文には心地よいリズムがあり、音読すると無条件に楽しい。また、何度も声に出して読む

ことにより、文章理解が進む。小学校時代に比べると減少してはいるものの、中学生の中には、依然音読の好きな生徒がいる。そこで、ここでは、ロールプレイ的に音読を取り入れた、次のような授業を提案する。

- (1) ヤンおばさんやルントウとの再会場面について、情景を考える。
- (2) 「わたし」・ルントウ・ヤンおばさんの心情を考えながら、再会場面を各自で音読する。
- (3) 再会場面を、「わたし」・ルントウ・ヤンおばさんの会話と地の文に分け、役を決めて音読する。その際、役を変えて音読させてみたり、音読の仕方について話し合わせたりしてみるのもよい。

〈例〉↓ルントウと三十年ぶりに再会した「わたし」の第一声「ああルンちゃん——よく来たね……。」は、様々な思いが一気にこみあげてきている感で読むといいね。それに対して、ルントウも、初めは、声にはならないけれども、最後は、あきらめの気持ちになっただけかな。でも、最後は、あきらめの気持ちになっただけかなと思う。だから、「だんな様！……。」は、感情のこもらない機械的な声音のほうがいいと思うよ。

文章を声に出して何回も読むと、一度では分からなかったことや、黙読では気づかなかったことが明らかになったりする。本文の一部を選んで視写させてみたりすることも、文章を読み深めるのに有効だろう。